「日本写真保存センター」調査活動報告(20)

家族の暮らし、戦時下の訓練、戦後を生きる

松本 徳彦（副会長）

写真は時代の空気を端的に記録している。どこにでもある家族の記録にも時代相が克明に写っているから、観るのが楽しい。限られた人たちの道楽とまで言われた写真。写真機は勿論のこと感光材料までを輸入品に頼っていた時代はやむを得ない。昭和に入ってからは次第に戦時色が強まってくる。時の流れには逆らえないプロパガンダ。演出された写真にも真剣さがにじみ出ている。敗戦により時代は大きく変化した。そうした変動は撮る人たちにも大きく影響を及ぼしている。当然ながら被写体の選択から捉え方まで、作者の個性が如実に表出している。写真は社会を写す鏡のようだ。

辻本満丸（1877～1940）家族の歴史をガラス乾板で残す

大正から昭和初期の家族をさまざまなシチュエーションで捉えたガラス乾板1,081枚が川崎市市民ミュージアムから寄贈された。そこには辻本家の家族構成から暮らしぶりが丁寧に記録されていた。大正期の着物姿、髪形、家具や調度品などと共に、使用人の立ち居振る舞い、服装に至るまでがしっかりととらえられている。当時の面影を知ることのできる貴重な記録である。たかが「家族写真」ではないかと思われるかも知れないが、そこには撮影者の意図を超えて、時代の影や因習、風習といったものまでを読み解くことができる。辻本家の生活様式、環境と奥深くにまで導かれるから面白い。

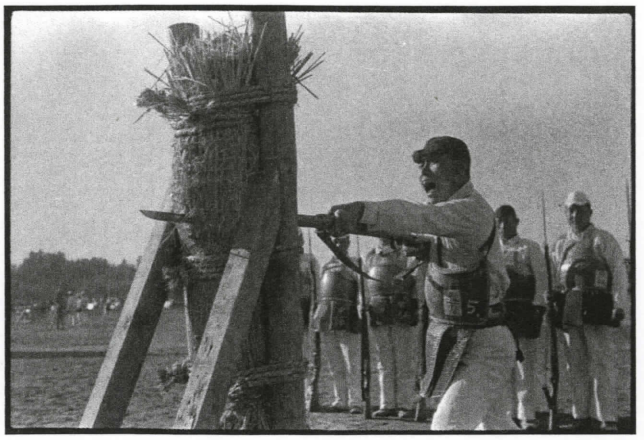
辻本氏は明治から昭和初期にかけて活躍された応用化学者で、東京帝国大学を卒業して農商務省工業試験所で油脂化学を研究。「サメの肝油からスクアレンを発見」、「油脂の研究」権威として学士院恩賜賞を受けるなど稀有な学者として知られる。若いころから写真に興味を持ち、風俗や山岳の写真を数多く撮る。その中に含まれる家族の写真は、学者らしい緻密な眼差しが漂っている。

辻本満丸：「家族の記録–乳母と子供たち」大正末から昭和初期

辻本満丸：「家族の記録—乳母車」大正末から昭和初期

国家宣伝グラフ誌『写真週報』から戦時下のニッポンを見る

『写真週報』は日中戦争が始まって間もなくの1938（昭和13）年2月16日、ときの内閣情報部が政府の広報宣伝政策の一環として、国政や法令などを国民や各官公庁に周知させるために、『官報』の付属刊行物として発行したものである。内容は大衆に読みやすく、親しみやすい、民衆の心を引き付けるものとして、写真をふんだんに使った国家宣伝グラフ週刊誌であった。誌面



撮影者不詳：『写真週報』255号　1943年1月20日号
必殺の一撃　銃剣術の猛訓練　海軍航空隊

構成は「国威発揚」「時局認識」「情報伝達」「知的刺激」からなっていて、オフセット・カラー印刷の見応えのするものであった。発行部数も当時としては最大40万部と破格の扱いであった。撮影は国内外の通信社と内閣情報部、南満州鉄道会社などと、木村伊兵衛(創刊号の表紙)、土門拳、小石清、永田一脩、加藤恭平、梅本貞男、光墨弘、不動健治、山端庸介など錚々たるメンバーがあたった。

撮影者不詳:『写真週報』231号　1942年7月29日号　非常呼集の発令。防火訓練　茨城県多賀高等工業学校

発行当初の誌面は、日中戦争の華々しさを謳いあげ、銃後の守りを啓発するものが多く、不用品交換即売会、廃品を活かしましょう、国民精神総動員と生産拡大、時局下の学生生活、満蒙開拓青少年団義勇軍といった国威発揚のスローガンが目立つ。国民総動員迫る！銃後の守りは女性の力で、国を挙げての戦争に猛進。掲載写真もそうした戦時体制を煽る記事に満ちていた。

緑川洋一（1915～2001）
瀬戸内の暮らしから国立公園の風景写真

緑川洋一は1915年、瀬戸内に面した岡山県邑久郡で生まれる。旧制中学を卒業し、日本大学歯科医学校に入学。卒業後、東京鎌田の総合病院に就職。1937年郷里に帰り「横山歯科医院」を開業する。1939年頃から緑川洋一の名で作品を発表。『写真サロン』で「静物」が入選し、アマチュア写真家として活動を始める。

1941年『写真文化』に組み写真、「石の出る南の国の島　瀬戸内海－北木島」を発表し話題となる。引き続き「グラフ塩田　塩は戦時下重要資源である」を、翌年には「農村の記録　二つの農法」、出征兵士の家族の記録や「銃後の生活」などを発表する。戦時体制下で渋々と軍の命令に従いながら発表活動をする。

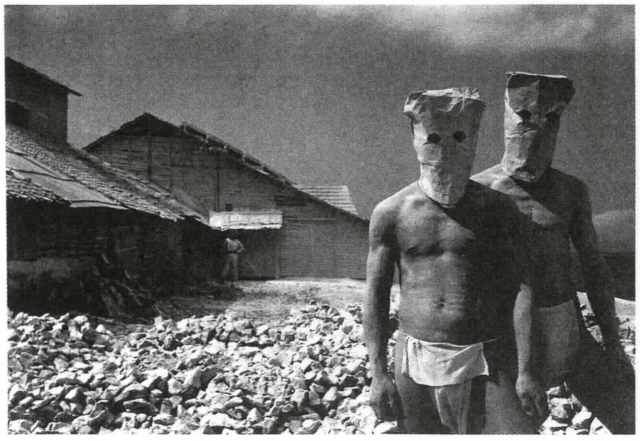
戦後は岡山市内で先輩の石津良介と写真工房開設。ファッショナブルな女性写真や風景写真を制作し額入り写真を店舗などに貸出すなどした。1947年、石津の紹介で米子の植田正治とともに、東京の「銀龍社」に参加し作品発表を続ける。1953年、二科会に写真部が創設されると「備前の裸祭」を出品し、第1回二科賞を受賞。この頃から精力的に「瀬戸の海」をテーマとする独創的な構成による風景写真を次々と発表する。1958年のキヤノンフォトコンテストで「人形師の娘」が最高賞を受けると、賞金で翌年、ヨーロッパを周遊し嘆美な風景写真を発表。1960年には写真集『ヨーロッパの風景』、『瀬戸内海』を発表し、各種の写真賞を総なめにする。以後、名実ともに色彩の魔術師と言われる個性的な風景写真の第一人者として君臨する。

戦中から瀬戸内の人々の暮らしに興味を持った緑川の、瀬戸の小島で働く人たちを捉えた作品は、ドキュメンタリーとして今日もその的確さが光っている。

お願い

あなたの写真原板（フィルム、乾板等）は大丈夫ですか？　現像済みのフィルムは支持体の性質上、時間が経過すると経年劣化が起こります。保管箱を開けて、酢酸臭がするようでしたら、ビネガーシンドロームが起こっています。急いで、「写真保存センター」にお問い合わせください。

TEL:03-3265-7451　又は 03-6272-4331



緑川洋一：「石灰工場の人々」　1954年

緑川洋一：「夜の鳴門急潮」　1950年